
不思議な夢（お題：さみしげ）

結衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な夢（お題：さみしげ）

【Nコード】

N8405V

【作者名】

結衣

【あらすじ】

めったに夢を見ないはずの少年は、最近毎日同じ夢を見ていた。目が覚めれば、自然と涙を流してしまう。しかし夢の内容は、起きた頃には思い出せなくなっている。彼はなぜ夢を見るのだろうか？

お題配布サイト「ひよこ屋」様 (<http://id15.fm-p.jp/33/Yellowmarfee/>) からお題を頂きました。今回は「05のお題」より「さみしげ」という題で書きま

५.

また、あの声に泣くのかな（前書き）

お題配布サイト「ひよこ屋」様（<http://id15.fm-p.jp/33/Yellowmarflee/>）からお題を頂きました。今回は「05のお題」より「さみしげ」という題で書きます。

- ・また、あの声に泣くのかな
- ・これでよかったんだよね？
- ・言えなかったよ、いつぱい
- ・哀しいから忘れちゃったの
- ・ばいばい、またあそぼうね

また、あの声に泣くのかな

一人の少年がベッドに横たわり、眠っている。

「……………なんだ？」

彼が目を開けるや否や視界がぼやけた。まばたきすると、涙がぼろぼろと流れた。手で拭うと、指に涙の粒がついた。それを服で拭き、彼は身体を起こす。まだ涙はとまらない。

「何だろう……………」

少年ミーミツヤは首を傾げつつ、側にあつた服に着替えた。服に染みがつくが、気にせずテーブルに着く。残っていたパンにジャムを塗り、口に含んだ。甘酸っぱいイチゴジャムの香りが口に広がる。量は減ったが、まだ涙はでてくる。

夢などほとんど見ないのが常だが、ここ最近は妙だった。なぜか毎日夢をみる。そして目を覚ますと、必ず涙があふれるのだ。

「何なんだろう……………」

食事を終えると、ミツヤはそのまま座っていた。気持ちを落ち着け、涙が完全に止まったのを確認し、外へと出かけていく。

図書館に入って最初に目につく、本の貸し出し等を請け負うはずのカウンターには誰もいない。不用心だな、と思いながらミツヤは奥へと進んだ。

周囲には本棚があり、様々な本が整然と並べられている。天井近くまで高さのある本棚の横を通り過ぎ、彼は進んでいく。まだ開館したばかりだからだろう、読書をするために設けられた席には誰も居なく、本棚で本を探す人の姿も見られない。

「どうするかな……………家に入るのは気がひけるし」

本棚と本棚の間にある扉——この図書館を管理する青年の住む家につながる——の前に立ち、ミツヤは躊躇している。その前を行ったり来たりして、時間をつぶす。

「どつしよつ……いたつ」

突如扉が開き、ミツヤはぶつかってしまった。額を押さえ、扉を見る。

「ミ、ミツヤ？ 大丈夫？ ごめん」

一人の青年が話しかけて来た。彼はダイスといい、図書館を仕切るとともに、ミツヤを含む村の希望者たちの勉強を手伝っている。

また薬の調合を得意とし、彼が作った薬を別の人に村で売らせている。

「あ、すいませんこんなところで……あの、聞きたい事が」

「何、また質問かい？ 勉強熱心だね」

「……毎日同じ夢を見るんです。俺、夢なんてめつたに見ないのに、最近はずつとなんですよ。何か気になって……」

「恋でもしたのかい？」

「は？」

予想外の答えにミツヤは言葉を失った。何を言っているのかが理解できず、ただダイスの言葉を待つ。

「恋をすると、好きな相手の姿が夢に映る……私の姿を夢に見る女性が多いかもしれないな」

ダイスは本気とも冗談とも分からない調子で軽く笑う。そんな相手をみて、ミツヤは溜め息をついた。

「違いますよ、先生……そんなんだから、女の人が勉強を教わりたがらないんですよ」

「ひどいなミツヤは。で、どんな夢なんだ？」

「えつと……覚えてる事はほとんどないんです」

「夢の内容を教えてくださいるか？」

ミツヤはどうか思い出そうとするが、ほとんど思い出せずに黙り込む。なるべくしつかりと伝えたいのに、上手くいかないもどかしさ。早く思い出さなければ……と焦ってしまう。

「完璧に思い出そうとしなくていい。君が覚えている範囲で教えてくれ。何でもいい。色でも音でも、怖い嬉しいでも……」

ダイスは優しくミツヤに語りかける。

「本当に少ないんです。真っ暗な中で、声が聞こえる……それ以外にもあった気がするし、なかった気もする」

「声？」

「女の子の声です。『ミツちゃん、早く来てよ。遊ぼうよ』って声をかけてくるんです」

「うーん……何時頃から見てるか分かるかい？」

「はい。一週間ぐらい前からです」

「その夢について、他にあるかい？」

「これは夢の中ではないんですけど……」

ミツヤは目が覚めた後の状況を言おうとするが、恥ずかしくてなかなか口にだせない。しかし言わなきゃ駄目だと思い直し、やっとのことで言葉にする。

「俺、泣いてるんです。起きた後に」

「……気にしないようにすれば、そんな夢見ないかもしれないよ」

「そうかもしれませんが。だけど考えてしまっし、何もなかった事にはしたくありません」

ミツヤは断言する。

「同じ夢を見てる事は確かなんです。だからその理由を俺は知りた。絶対に、何としても知りたいんです。この夢を見ないようにするために」

ダイスは何かを考えているようだが、何か思いついたらしい。一歩前へ出て、どこかへ向かう。

「ちよつとこつちへ」

ダイスに連れられて来たのは、図書館の奥だった。主に精霊や魔物、幽霊についての書物が中心に並べられた本棚に近づく。

「……これかな」

ダイスは一番上の段に置かれていた本を手に取り、ページをめくる。ミツヤは本をじっと見つめ、ダイスの手がとまるのを待つ。ページが進んだり戻ったりする事数秒、ようやくあるページにたどり

着く。

ミツヤはそのページのタイトルに目を向けた。『幽霊』と書かれていた。

「ちよつと待つててくれ。この章のどこかに」

ダイスはページに書かれた文章に注意して目を通していく。

「あつたあつた。これだよ」

ダイスはある文章を指差した。彼の指が示す文章をミツヤは詠む。そこには「夢に現れる幽霊」と記されている。

「この文を見てくれ」

ダイスに本を手渡され、ミツヤは彼の言う通りに文章を読み進める。

夢に現れる幽霊は、人の魂を連れて行くことするという。ではその幽霊の特徴を順に述べていこう。まず幽霊は連れて行きたいと思つた人に声をかけ、姿を現す。この際、幽霊は寂しそうな声をだすという。そして夢の中で人間と遊ぶという。しかしその夢は、目が覚めると忘れてしまう。そして理由も分からずに、人は涙を流しているのだそうだ。

「……幽霊」

ミツヤは記憶を辿る。数少ない、夢に関する記憶。自分は幽霊と遊んだか、自身に問いかけても答えはでない。しかし寂しそうな声だったのはよく覚えている。そして涙を流す事は、今朝もしたばかりだ。

「……とりあえず今日も同じ夢を見たら、また来てくれ。見た夢を忘れないように、起きてすぐメモした方がいいな」

「分かりました。ありがとうございます」

ミツヤは頭を下げると、本を手にしたまま外に向かった。そして考え事をしながら、扉をあける。

(……魂を連れて行くこととする？ ああ、早く真実が知りたい)

彼は本を読みながら帰路につく。途中で町の人にぶつかったり、地面につまずいたりしたが、それでも本は閉じなかつた。本に全神

経を集中させ、歩を進める。

夜、彼は普段と同じ時刻に布団に入った。最初はなかなか眠れなかったが、やがて自然と睡魔がおとずれ、彼は眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8405v/>

不思議な夢（お題：さみしげ）

2011年8月16日03時19分発行